

【86】水辺と酒

川と湖沼の水辺で、あるいは船上で酒を飲むのは酒飲みにとっては時代を問わず楽しみなことです。

古代中国の唐の首都「長安」に「曲江」という大きな池と川の織りなす風光明媚な名所がありました。詩聖とうたわれた大詩人「杜甫」もよく散策したようで、「曲江」という題の詩がありますので、その一部を紹介します。(横書と現代漢字で失礼します)

(原文)

朝回日日典春衣
毎日江頭尽醉歸
酒債尋常行處有
人生七十古來希

(書き下し文)

朝よりめぐりて日々春衣を典し、
毎日江頭 酔いを尽くして歸る。
酒債尋常 行く處に有り、
人生七十 古來希なり。

解釈すると、“勤務先の朝廷から退出し、(夏も近いので)春衣を一枚、又一枚と質入れし、毎日のように川のほとりに出かけて酒を飲み、とことん酔っ払って帰宅する。酒代のツケはそこら中の飲み屋にたまっているが、70歳まで長生きする人は滅多にいない。”ということのようです。

この詩の解釈は多くの杜甫の解説書にあり、大略違いは無いのですが、私が違和感を持つのは、後半の、酒代のツケがたまっていることと70まで生きる人が少ないというくだりが論理的につながらないことです。高名な吉川幸次郎先生の大著「杜甫詩注」にも、書き下し文と変わらないそのままの内容が記されているだけです。

専門の学者先生が解説してくれないので、素人の私が解釈します。私はこれを読んだとき、杜甫は“いくらツケが溜まろうとどうせ人生は短いだから気にすることはない、払い終わらないうちに死んでしまうんだから。”という少々居直った感じを詩にしたのだらうと思いました。詩聖杜甫に対して少々失礼になりますかね。

なお、この詩は飲兵衛のはなしより、最後の「古希」という70歳を意味する用語の起源として有名です。